

孫から見た山極勝三郎の生涯と逸話

山極勝三郎様の孫 山極 清一様

山極家の家系は初代は足利氏に仕え、足柄山の山極城主の武將で、足利家の衰退で下山して四代は甲斐の武田に仕えました。七代は信玄に仕えております。信玄に嫌われる事情があり信州丸子に追放され、信玄没後、真田信之に仕え、大坂夏の陣で敗北し、信州に戻りました。武將から身分が代わり十一代は松平家の奥医師になり、明治維新の十五代吉哉まで山極家は医者の家柄になりました。吉哉には長女包子からしばらく嫡男に恵まれず、当時上田で最優秀と評判の山本家の勝三郎が養子候補に選ばれました。勝三郎は小学校で文部省から発行の「与地誌略」の世界地理歴史の本に興味を持ち、将来は外国で学問をする希望を抱いていた様でした。勝三郎は最初養子の話は乗り気でない様でしたが、留学可能という条件が決め手となり、明治12年に包子と養子縁組し、明治17年に結婚、明治24年にドイツに留学しました。

人工癌の研究に大きな影響を与えたのは病理学のウイルヒョウ博士の細胞刺激説と英国の煙突掃除夫の煤による腫瘍と組み合わせ、実験にはそれまで人工癌の発生したことがないウサギの耳にコーラタールを助手の市川博士が1年の長きに渡り塗布

を続け遂に大正4年に世界最初の人工癌の発生に成功しました。祖父の幻のノーベル賞の話や人工癌成功の市川博士については多くの著書に譲り、ここでは祖父勝三郎の人柄に触れてみたいと思います。上田から上京しても故郷への愛着は常に強く、明治18年には上田郷友会誌の発起人になり、会誌の発行は他に見られぬ130年有余の長きを誇っています。会誌初期には上田の繁栄のため、松代や松本、更に薩長にも負けまいとの祖父の意気込みが継続の原点の一つになっていたと思います。

祖父は解剖を伴う病理学の関係で、明治32年に結核を患いました。担当医の忠言に従い、驚くほどの絶対安静を厳守しました。父から小さい時、聞かされた話としては天井から小型の机を逆さに吊り下げ、それに医学書を取り付け勉強していたという驚く話でした。

また祖父は子供や孫に感染しない様に医者と祖母以外は部屋に入らず、孫は絶対抱かず窓越しにしか見ませんでした。昭和3年頃には症状は可なり回復していたのか、ドイツの医学賞の受賞に際して家族や孫と一緒に写真を撮っています。昭和5年に祖父の死去後、長与先生の執刀で解剖が行われた時、祖父の

結核は驚く程消滅していたそうです。

また祖父は研究と闘病、祖母は看護と内職を含む家計のやり繰りで追われ、二人揃って出掛けたのは僅か2回しかなく、1回は父が両親を上田、善光寺にお連れした時と、2歳の私が病床に伏せていたとき、清水に揃って見舞いに来た時の2回だけです。

最後に祖母包子は祖父の看護に忙しく、更に祖父の実家は明治の廃藩の煽りで家計が苦しくなり、その援助も必要となり、大変な貧乏暮らしに長らく追い込まれました。

ある新聞記者が山極家に祖父の事で訪問した時、応接に出た祖母の着物が大学教授の夫人には全く相応しくない質素な姿に驚き、思わず「学者と清貧」と書く所を社説のタイトルに「学者と赤貧」と記載した記事を読んだことがあります。

祖母は祖父の闘病と研究生活を守るのに大変努力しながら、貧乏に負けることなく、子供や孫を一人も結核に感染させず、子供達を立派に育て上げたのには頭が下がります。この貧乏生活も在籍25年の祝賀会では、祖父の弟子達を中心に、寄附金を集めて借家を祖父の持ち物に替え、多くの贈り物も下され、生活に余裕を持たせる配慮をして下さいました。その会の最後には祖母の内助の功を讃え、金時計が贈呈されました。

祖父と祖母はお互いに尊敬し合い、結核と戦いながら人工癌発症に成功された偉大さに改めて敬服の念を捧げたいと思います。